

宗祖の孝道

佐藤 慈典

孔子は『夫れ孝は仁を爲すの本か』と云はれ、釋尊は『教化の紀は孝順を本とす』と曰はれてあるが總て善根の根本と成る者は孝である。宗祖云く、『如何に況や佛教をあらはん者父母師匠國恩を忘るべしや』と、御聖訓は詮する所報恩の二字に歸するのである。報恩は本知思より發る故に思を報せんとするには先づ恩を知らねばならぬ。此知思報思は實に世間出世間の最大事である。故に佛陀は思を知り思を報ずべしと仰せられたのである。今是れを宗祖に於て窺ふあらば、宗祖御一代の行事は總て知思報思の爲である。天福元年御年十二にして清澄山に登り、延應元年御年十八にして御剃髪し、仁治三年より己來十二年の間叡山に奈良に三井に高野に修學せられた宗祖の前半生は、實に知思報思の準備であつた。されば宗祖は又『此大恩を報せんには必ず佛法を習ひ究め智者とあら

では叶ふべからず』と仰せにあつて居る。此仰に依て見れば宗祖の修學は父母師匠國主等の大恩を報ずる所の智者と成らんが爲である。然らば何故に智者とあらでは思を報する事が出来ないのであらうか。宗祖があらゆる刻苦修學遊ばされたのは先づ佛教の權實を辨へんが爲である。教法の權實を辨へずして、如何に父母師匠國恩を報する事が出来るであらふか。

而して宗祖の後半生、即建長五年四月御年三十二にして開宗、以來弘安五年十月の御入寂に至る三十二年間は此大思を正しく報せられた時代である。建長第五の開宗は則其宣言である。開宗後御敵景信の難を避けて華房に到り、進んで鎌倉に大折伏をせんと決意したる宗祖は、先づ故郷に歸りて父母を得度せしめ、本門の妙戒を二親に授けられたと云ふ事は實に意味の深い事だと思ふ。而して後宗祖は或は鎌倉の瓦石の雨の中にも、或は龍の口の頸の座にても、寸時も忘れた事の無いのは御両親の事である。伊豆の伊東へ御流罪に成りたる時

も船守彌三郎夫婦の厚い情けを受けては父母の伊東に生れ替りて日蓮を慇懃み給ふかと思召され、龍の口の土壇場にても、今度頸を法華經に奉り其功德を以て父母に回向せんと、則宗祖は諸の善根功德は先づ父母に奉つたのである。身延御隠棲の後も尙父母を慕ひ、嶮阻極まる五十町の急坂を風雨を厭はす奥之院に登られ、東の方遙かに故郷を眺めては暗涙に咽びたまひて追善の御讀經遊ばされし如きは、釋尊はいざ知らず、他に於て如是孝養を見る事が出來得るであらうか。我々法華經の行者は聖訓に隨ひ恩を知り而して報恩の修行が何より肝要である。

宗教家の覺醒

朧 月 生

今や文運日と共に進み、明治維新已來、五十年の進歩は實に偉大なものである。然し此れを以て完全なる進歩とは言ひ得られまい、何故なれば、

それは物質的文明にのみ走りて、其處に何等内面的精神文明が伴はぬからである。科學文明は可成進歩した様であるが、精神的文明も是に伴つて進歩したであらうか、甚だ疑はしいものである。

諸君試みに眼を現時の思想界に放て見よ、其處に何れだけ、吾人に満足能へる者があるか。ないではないか。殊に思想界に於ても、宗教界に於ても然うである。現時の宗教界は如何だ。其の信仰は太く衰へ徒らに儀禮の、末節に華美を競ひ、僧侶は救済の道を忘れて、衆俗と共に、現世の欲求にのみ吸々として、日も足らざる有様ではないか、往古淳朴の風、敬虔の俗、蕩然として、將に地を掃はんをして居る。實に宗教界の危機である。宗教家は、大いに覺醒せねばならぬ。殊に吾宗の如き、一生活動を以てせられし、祖師日蓮の門下として、其の主義を繼承する吾人、斯の如くにして、尙本化門下と稱する資格があるか。吾宗は實に六百年の昔、宗祖が、鎌倉の街頭に、四箇の格言を絶叫せられてより、已來多くの、先師の、血